

# 渋沢邸で グラント將軍をもてなす

櫻園通信 86 令和5年2月  
東京都健康長寿医療センター  
養育院・渋沢記念コーナー  
連絡先：老年学情報センター  
宮本孝一  
老年学情報センター



グラント將軍

グラント將軍の来日 明治十二年、グラント將軍が来日しました。グラント將軍とは元アメリカ大統領で南北戦争の北軍の將軍です。大統領を退任した後、世界周遊旅行に出かけました。日本への滞在もその旅行です。七月に東京に到着することになり、日本側は接待委員を結成してグラント將軍をもてなすことになりました。接待委員の代表は渋沢栄一でした。渋沢栄一三九歳の頃です。この年の八月に養育院事務長という役職名は院長に改称、事務長だった渋沢栄一はこのときから養育院の院長となります。また一〇月には上野の養育院本院が神田に移転しました。上野の場所が博物館用地に決まったためです。

接待委員は、グラント將軍をどのようにもてなしたらよいかわかりませんでした。「日本流の御饗応がお気に入りはすまいし、さらばと云って西洋式の事は我々は何も知らないから余程困りました」と渋沢は語っています。(渋沢栄一伝記資料第三八巻 四五九ページ)

ともかく渋沢は「日本の国情が西洋諸国に劣らないと云うことを示そう」と考えました。(渋沢栄一伝記資料第二五巻 五二六ページ)

八月に「個人の家には招待しなければ西洋式の接待ではない」という話が出て、八月五日に渋沢の飛鳥山邸で午宴会を催すことになりました。

渋沢邸でのユニークな催し グラント將軍を渋沢邸に招くにあたりユニークなアイデアが出ました。武道の演武です。

渋沢が神道無念流の剣術を身につけており、北辰一刀流の玄武館にも出入りし、様々な武術家と交流を持っていたため」と推測されます。

(中嶋哲也 術から文化へ：元米国大統領グラントの演武鑑賞と柔術 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 第六六巻 二〇一五)

渋沢邸での午餐会では庭の飛び石を撤去して平らな地面の試合場がつくられ、その左右に幕を張って武道家たちの控室としました。

武道演武について当時の新聞では次のように書いています。

柔術に名高き磯又右工門氏が其門弟を連れ来たり、始めに柔術の模範を取り次に乱取を為す。畢て榊原健吉氏の門弟数人鎖鎌・長刀・太刀の試合等数番を一覧に入れしに、グラント君も其技の精妙なるを感賞せられ深く渋沢君の款接の懇到なるを謝せられ、午後二時すぎに帰館(東京日日新聞)

強い植木職人 武道演武の様子を渋沢栄一の娘歌子が書き残しています。

予定していた演武が一通り終わると、グラント將軍は柔術に興味を示して「柔術は力と技術といづれを重しとするものであるか」と尋ねました。

柔術家と武術を知らない力自慢で試合をさせてみようという話になり、渋沢栄一は邸宅に出入りしている植木職人の三五郎という体の大きい人物を呼びました。対する相手は磯又右工門が連れてきた弟子でした。名前はわかりません。

植木職人と柔術家はもみ合うばかりで勝負がつきません。グラント將軍は気の毒だから引き分けにできないか、と言いました。最後に柔術家は植木職員にチカラでねじこせられて「参った」と言いました。力が武術よりうまわるという結果です。

すると磯は別の弟子でもうひと試合をと申し出ました。次の試合では、別の弟子が相手の力をうまく利用して植木職人の体を崩して地面に倒しました。

力より技術という結果が出ると、グラント將軍はたいへん喜びました。

誰が植木職人と戦ったか 植木職人と戦わなかった師匠磯又右工門（磯正智）は天神真楊流という柔術の流派を開いた人物です。渋沢邸では、磯と弟子の福田が柔術の型を、五代と嘉納という門弟が乱取りを披露しました。

このとき乱取りをした一人が、のちに講道館柔道（現代の柔道）を創始し、現代でも「柔道の父」「日本体育の父」と呼ばれる**嘉納治五郎**（当時二〇歳）です。

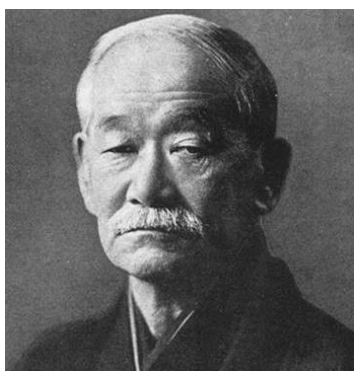
治五郎は福田の道場で天神真楊流柔術を学んでいました。またその二年前に東京大学文学部に入学し、渋沢栄一の経済学の講義を聴いていました。嘉納治五郎が明治一四年に大学を卒業したとき、同年の卒業生に森鷗外（医学部）がいました。

柔術の師である磯や福田が亡くなるのと治五郎は起倒流柔術を学び、明治一四年に独自の柔道を確立。翌年講道館という道場を開きます。

これが国内外に広まり、オリンピックの正式種目にもなっている「柔道」です。嘉納治五郎明治四二年には国際オリンピック委員会の委員に就任。東京オリンピック（昭和一五年）の招致に成功しました。残念ながら日中戦争の激化などの事情で東京大会は実現できませんでした。

渋沢邸出入りの植木職人と試合をしたのは五代と嘉納かそれとも福田か、記録は残っていません。

植木職人に勝った方が負けた方が、どちらが嘉納治五郎だったのでしょうか？



嘉納治五郎

